



ポルティコの広場

年頭にあたって

新潟県立看護大学学長 中島 紀恵子

数十年ぶりの豪雪の中、平成18年の幕開けとなりました。平成16年夏の7.13水害、同年10月23日の新潟県中越大地震、そして今季の雪害。ここ数年にわたり、立て続けに自然災害を被った新潟県ですが、ささやかな朗報は、今年3月17日、第一期の学生たちが卒業式を迎えることです。大自然の懐にいだかれて、地域文化のありようの中に看護学という学問の追究があるのだという理解を基盤に、学生はこれまで育んできた自己の資質を、新転地で力強く発揮してくれることを願ってやみません。教職員一人ひとりが精一杯の慈しみをもって学生を送り出す喜びと寂しさは、昔から引き継がれている学園文化といえるものでしょう。

さて、本学は完成年次にあたり、来年度から教育組織を大きく変更し、これまでの講座制を廃止します。新しい教育体制は、来年度開設の大学院教育における体制をふまえたものであります。新体制でのねらいは、教育において、教員個々が教科目ごとに結集し、話し合い、教育の質の向上に向けて、今まで以上に工夫や努力が反映される仕組みを意図したこと、また研究において、教科目にとらわれないことと課題ごとにプロジェクトを組んで知恵を出し合う、そういったことがより行いやすい組織体制としたことです。大きく共通科目と専門科目に区分し、共通科目は「人間環境科学」と「生物・医学」の領域、専門科目は「基礎看護学」「臨床看護学」「地域生活

看護学」の領域から構成します。この新しい組織が生かされるよう、教員それぞれが自立的であり、そして柔軟性に富む教育研究者であることを切に望んでいます。

本年4月より本学に大学院（看護学修士課程）が新設されることも、大きな変化です。1学年の定員は15名で、高度専門職業人の育成を大きな目標に掲げています。県内外で働く看護実践家の方々にもトライしていただけるよう、長期履修制度や専門看護師に対応したカリキュラムを用意しました。詳しくは本学ホームページ（<http://www.niigata-cn.ac.jp>）をご参照ください。

本学は、本年も、教員が一丸となって、より質の高い教育・研究を展開できるよう研鑽に励んで参ります。大学の成熟過程において直面する困難な状況を私どもが乗り越えていけるよう、どうぞ絶え間ない関心を、本学にお寄せいただけますようお願い申し上げます。



2006年、年頭のキャンパス



- 1ページ 年頭にあたって……中島紀恵子
- 2ページ 第一期生の看護研究
- 3ページ 海外研修報告
- 4ページ 看護学実習報告／学生活動
- 5ページ 学生活動／教育組織の紹介
- 6ページ 講演会報告
- 7ページ 看護研究交流センター報告／トピックス
- 8ページ サークル紹介（屋外球技サークル）／入試関連情報



第一期生の看護研究

卒業までの最後のハードルともいえる「専門ゼミナール」「専門実習」「看護研究」の3つの連続する教科目が、昨年12月7日の論文提出と、2006年1月17～18日の看護研究発表会をもって、無事終了しました。昨年4月のゼミナール開始から約1年。学生は自らが選んだ専門領域、研究テーマに立ち向かい続けました。

看護研究を仕立てあげるまで

第4学年 野尻 千晶

私は小児看護学ゼミに所属し、幼児を対象とした採血時の行動に関する研究を行いました。研究論文を提出し終えた今、これまでの経過を振り返ると多くの失敗と苦勞が思い浮かびます。例えば、データを収集させていただく際、その時々で没頭してしまった為に本来私が持っていた目標を見失いそうになることがありました。また、研究に協力して頂く子どもやご家族に対し、子どもの症状やご家族の心理的状況を把握しながら研究を行う必要性を強く感じると共に、その難しさに悩むときもありました。

しかし、研究論文を作成することで、得るものが大きかったことも事実です。研究で悩んでいる時には、先生方に話を聞いて頂きました。先生方も多忙だったにも関わらず、丁寧な指導や優しい言葉を頂き、それはその時の私にとってとても救いになりました。

研究論文の提出を終えて

第4学年 大竹 亜美

私は、看護研究のテーマとして、3年次の老年看護学実習で印象深かった、認知症高齢者の口腔ケアについて取り上げました。漠然とした疑問からテーマを選んだものの、どのように研究につなげていけばいいのかわからず、なかなか進まずに苦勞しました。しかし、先生方のアドバイスやご指導のおかげで、研究計画書の作成、施設でのデータ収集、論文製作と、研究を進めていくことができました。また、テーマが自分のやりたいこと、興味のあることだったため、大変ながらも、最後までやり通すことができましたのだと思います。このように、研究では自分の興味のあること、疑問に思ったことについて深く学ぶことができるため、それまでの学習とは違った楽しさを味わうことができました。

看護研究発表会

2006年1月17～18日（18日は掲示のみ）の2日間にわたり、ポスタープレゼンテーション形式による看護研究発表会が開催されました。発表者一人あたりの持ち時間は、発表6分、質疑4分の計10分で、16のセッションに分かれて実施されました。各群の座長も学生がつとめ、どの会場も活発な質疑が行われていました。また、この発表会には専門実習などでご指導をいただいた機関の方々、また看護研究のプロセスで様々なご助力を下さった方々



発表を聴く参加者

もお招きしました。学生はもとより、学外の指導者の方々も含め、多くの意見交換が展開され、最後には学生のポスターの前で一緒に写真をとる風景もみられました。

専門領域別の配置学生数			
基礎看護学	12人	成人看護学：慢性期	12人
実践基礎看護学	10人	成人看護学：急性期	8人
母性看護学	9人	地域看護学	16人
小児看護学	7人	老年看護学	10人
		精神看護学	7人

た。また友人の存在も大きく、一緒に研究を行う者同士励ましあったこともありました。

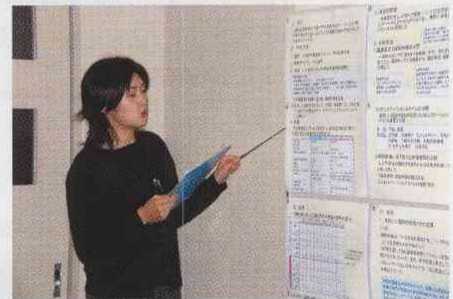
私の看護研究の内容は全く不完全なものです。しかし、研究を行うことで、苦勞以上の大きな学びを得ることができたと感じています。私は、4月から病院の看護師として働く予定ですが、看護研究で得られた学びを十分に生かして働きたいと、今強く感じています。



ゼミのひとこま

今回の論文作成を通して、看護研究とはどのようなものなのか、どうやって行われているのか、ということを知ることができました。また、いろいろな研究論文に触れて、さまざまな分野の研究が行われているということを知り、こうした看護研究により、看護の発展があったのだということを実感することができました。

看護研究の実施は大変でしたが、これまでの学習の集約となり、とてもよい経験だったと思います。



発表会に臨む

発表を終えた学生からは、「とても緊張したけど、質問をしてもらえてとてもうれしかった」「多くの発表を聴くことができ、こんなテーマもあるんだ、と改めて気づかされ、とても参考になった」などの意見が聴かれました。また座長をつとめた学生は、「事前に質問を用意しておくように、と先生から言われたけど、いっぱい質問が出て、よかった。また、どの発表もすばらしくて、聴き入ってしまった」と話していました。



ポスターによる報告

専門実習の機会を提供して下さった関係機関の皆様、看護研究にフィールドとして、あるいは研究協力者としてご支援下さった皆様に、改めてお礼申し上げます。

カリフォルニア州におけるナース・プラクティショナーについて

看護基盤科学 助教授 朝倉 京子

2005年の夏、カリフォルニア州デービスにて海外研修をして参りました。今回の研修では複数の目的をもって渡米しましたが、今回は紙面の都合もありますので、カリフォルニア州のナース・プラクティショナー（以下、NPと略す）に関する調査結果を中心に報告致します。

NPとは、大学院修士課程程度の教育を受け、定められた専門的な訓練を受けた看護職者で、検査の指示、診断、治療ができる看護の職種です。彼らの多くは地域のクリニックや、総合病院の外で働いています。

まず驚いたのは、彼らがほぼ完全に医師から独立して働いているということです。カリフォルニア州の法律では、NPは医師のスーパーヴァイザーを受けなければならないことになっています。しかし実際に話を聞くと、NPはスーパーヴァイザーである医師と月に1回ぐらい、電話などで簡単なコンタクトをとる程度で、日々の診断や治療については自らの責任ですべて行っているのです。

また、私が訪れたクリニックの多くでは、複数の診察室があり、そこに医師とNPがそれぞれ待機していて、患者さんが医師にするかNPにするか選べるようになっていました。患者さんからすると、医師であってもNPであっても治療としてやってくれることは同じであって、むしろNPは看護のバックグラウンドを持っているため、より話を聞いてくれる、関心を示してくれる、などの良さがあるので、人気があるということです。医師でもNPでも、患者の支払う金額は同じであることから、このような外来においては、誰が医師であって誰がNPであるということの区別は重要ではないということを感じました。

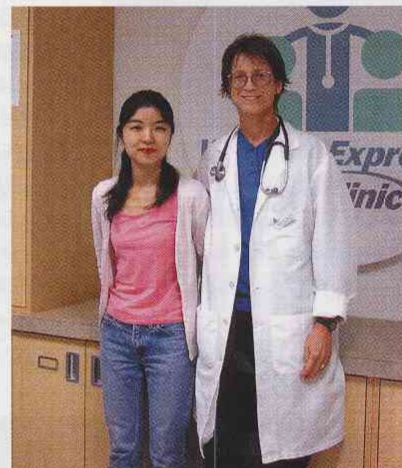
次に、NPの社会的地位の高さと待遇の良さに驚きました。彼らの給料は、勤務するクリニックによって差がありましたが、初任給で70,000~90,000ドル、経験のあるNPであれば100,000ド

ル程度でした。これは、アメリカ社会ではかなりの高給取りです。それでも医師を雇用するコストに比べれば2/3ですので、アメリカの議員や官僚には、近い将来、クリニックや病院の外来における診断・治療はすべてNPやPA（フィジシャン・アシスタント：看護の免許は持たないが、大学院レベルの教育を受け、NPと同様の仕事をする医療職）が行い、医師はごく限られた難病や特殊な治療のみを行うようになると予測する人もいます。

このように書くとアメリカの看護はとても進んでいるように感じられますが、NPが最初に登場した1970年代は、医師との間の葛藤が絶えなかったこと、医師のスーパーヴァイザーはより厳しいもので、NPが書く処方箋すべてに医師のサインが必要であったという時代があったそうです。

日本の看護教育は高学歴化し、専門看護師などの高度に専門的な資格を整備しつつありますが、肝心の看護職者の権限に関しては戦後60年全く変わらないままです。日本の看護職者がより高い専門性と自律性を確保するために、我々はもっと力を注ぐべきなのかもしれない、と強く感じた研修でした。

最後に研修の機会を与えてくださった大学と同僚に感謝を申し上げます。



ウエルネス・エクスプレス・クリニックのエリザベス（ファミリー・ナース・プラクティショナー）と

ケベック市の英語

看護基盤科学 助教授 中村 博生

海外研究の対象都市は、カナダ連邦のケベック州ケベック市であった。研究テーマは、「外国における外国語としての英語教育の現状調査」である。この州は言語教育の歴史をもつところで、「イマージョン教育」に代表される第2言語教育のメッカといっても差し支えない土地である。ケベック市は、人口169,076人(2001年)で、メキシコ以北の北米唯一の城壁都市である。州の公用語はフランス語であり、フランス文化が随所に見られる。1608年にサミュエル・ド・シャンプランによって創設され、ヌーベル・フランス植民地の首府であった。その後、七年戦争では英軍の攻撃を受け、1759年市郊外のアブラハム平原で英仏両軍が戦い、仏軍が大敗した。パリ条約でイギリス領となり、1867年カナダ自治領が成立しオタワに首府が移転するまで英領カナダの首府でもあった。アメリカ独立戦争では米軍の襲撃を受けたが撃退している。

この市で、エコール・プリメーア（小学校）、エコール・セカンダール（中高一貫

校）、セジエップ（専門学校／短期大学）の英語授業を観察し、コミュニティの英語使用状況調査を行ってきた。印象的だったことは、英語の先生が、母語（フランス語）をできるだけ使わずに英語で授業を進めていることと、生徒が総じて意欲的に英語を学ぼうとしていることだった。町の人々も英語で話す観光客が多いため、英語を積極的に使おうとしている。このような環境が、市民を外国語により親しませる大きな要因であることが実感できた研修であった。



エコール・セカンダール

看護学実習報告

地域看護学実習を終えて

地域看護学 講師 平澤 則子

2005年の5月中旬から6月下旬にかけて、4年生（第1期生）は看護大学としては初めての地域看護学実習を行いました。

この実習は、地域集団の健康状態をアセスメントする「地域診断実習」1週間と、主に保健所・市町村の看護活動を学ぶ「保健所市町村実習」2週間、在宅療養者への看護活動を学ぶ「訪問看護実習」1週間の合計4週間です。

学生は、病院実習では見えにくい家族や地域の生活実態を、実際に地域を踏査して把握することの有効性、地域の健康ニーズを

把握し住民と共に解決する方法、サービス資源を整えるための関係機関との協同活動、病気と共に生きる患者・家族の主体性の尊重など、多くのことを学んでいました。

これらの実習を通して、地域全体を視野に置いて、各人のセルフケア能力の向上と家族・地域の力量を高めるようなコミュニケーションを目指すという地域看護学の特徴を十分に学ぶことができたと考えています。

今年度は、中越、上越地域の5保健所と6市6区、10訪問看護ステーションにご協力をいただきました。地域看護学実習は、県、市町村、訪問看護ステーションをはじめ地域の皆様方のご支援の上に成り立っております。今後ともよろしくお願いたします。

基礎看護学実習Ⅱを終えて

実践基礎看護学 助手 籠 玲子

2005年9月5日から10月14日の6週間、2年生（第3期生）は基礎看護学実習Ⅱを行いました。1週目、学内で、事前学習として看護過程の展開演習と看護技術の振り返りを行いました。2週目から、新潟県立中央病院で、前半・後半グループそれぞれ2週間ずつ、病棟実習を行いました。6週目、学内で、事後学習として病棟実習を振り返り学生間で学びを共有しました。

基礎看護学実習Ⅱは、2年生にとって初めての病院における実習でしたので、病棟実習初日は、皆とても緊張している様子でした。1日目に病棟のオリエンテーションを受け、それに引き続き2日目にかけて、看護活動の内容を知るため、看護師1名に学生1

名が同行しました。学生は、まず病棟の忙しさやその中で看護師の無駄のない効率的な動作に驚き、学生自身が看護師のような行動ができるのだろうかという不安を抱いていたようです。3日目から、学生自身が患者を受け持ち、患者への看護を展開しました。最初は、どのように患者と関わればよいか、何をすればいいのかという戸惑いがみられました。しかし、実習を進めていくうちに、患者への関心が深まるとともに学習も深まり、緊張も次第に和らぎ、患者に必要な看護を学生自身が主体的に展開していくことができました。今までの机上での学習が、臨床における看護と結びつくことで、学習意欲が深まったとの声もありました。また、実際に看護を展開する中で、学生自身が知識の足りなさを感じ、今後の学習の動機付けとなったようでした。実習の学びを今後の学習に活かすことができることを期待しています。

ふれあい実習を終えて

あったカラフル☆新発田市

第1学年(第4期生) 五十嵐 美奈子 田中 恵美
長井 静華 柳澤 真理

人にはそれぞれの生き方・暮らしがあり、それぞれの持つ価値観や考え方にも違いが生じる。私たちはそのことを、新発田市でのふれあい実習を通じて改めて学ぶことができた。この3日間は、私たちが大きく成長させた貴重な3日間（2005年9月19日～23日）であったと思う。

まず私たちは、この実習を行うにあたって、「地域の人々と生活者の視点に立ち、自ら積極的に働きかけ、生活様式、生活の基盤となる価値について考える」という目標を掲げ実習に臨んだ。2泊3日のホームステイをさせていただいたご家族の方々はもちろんのこと、精神や身体に障害をもつ方々や農家の方々とは、普段の生活ではふれあう機会のない人々であった。それぞれの場で活躍する人々とふれあってみて、それぞれの温かさを感じた。人の

温かさを親身に感じ、ふれあうことから分かることや人への理解の大切さを学んだ。

今回の実習は、これから看護を行う身である私たちが、人々のそれぞれの生き方や価値観、また人々の違いを理解するきっかけとなった。この新発田市でのふれあい実習では、人とふれあうことによって本当に様々なことについて考えさせられた。

ホームステイを温かく迎え入れてくださったご家族、私たちの実習目標が達成できるようにと力を尽くして下さった新発田市役所の保健師の皆さん、各実習先でお世話になったスタッフおよび利用者の皆さん、新発田市の皆さんに深く感謝したい。人に対する感謝の気持ちや、ふれあい実習で学んだことを忘れず、看護や日常活動に活かしていきたい。



ポスターによるふれあい実習報告会

学生活動

手作りの継燈式を目指して

2005年9月2日(金)、第2学年（第3期生）の主催による継燈式が開催されました。例年、9月末の開催ですが、今年度は実習開始時期が早まった関係から、この日の開催となり、会場も冷房設備のない体育館から、冷房の効くホールに移されました。会場を暗くして、ローソクの灯りを受け渡すという第1期生から受け継がれたスタイルのため、残暑厳しき折、冷房設備は不可欠なのです。



先輩から引き継いだ灯り

今回の継燈式実行委員は、赤松望さん、朝倉里衣さん、木村友美（委員長）さん、齊藤亜衣さん、瀬戸優希さんがつとめました。昨年の4月以降、何度も担当教員や事務の担当者と打ち合わせを重ね、式典と記念講演（講師：遁所直樹氏）の2部構成という新しいプログラムとなりました。その式典パンフレットには次のような第3期生の臨床実習に臨む決意表明が記されています。

1. 私たちは看護ケアを必要とする人々の痛みや苦しみを理解し、安らぎをもたらすことを心がけます。
2. 私たちは確認を怠らず、学びを生かし、より安全で効果的なケアを提供できるよう実習に臨みます。
3. 私たちは人々の健康を維持・増進できるように、その家族を含めてセルフケアの支援を行うことを心がけます。
4. 私たちはケアを必要としている人とふれあい、今まで学んだことを実践し、さらに理解を深め、これからの看護にいかします。

この日のそれぞれの思いが、このあと展開される臨床実習の中で自身を支え、そして後輩に引き継がれていくことが願われます。



式典を終えて

桜蓮祭を終えて

第4回桜蓮祭実行委員会・委員長 第2学年 阿部 浩也

2005年11月12日(土)に第4回桜蓮祭が挙行されました。開催にあたり、多くの方々のご協力・ご声援のおかげでこの日を迎えることができたと感じています。

春に第4回の実行委員会が発足し、1・2年を中心とした活動を始めました。昨年度の実行委員を経験した自分自身も仕事内容の把握が難しく、長という立場で全体をまとめる大変さを、日々実感しました。

今年度は、実習先の病院、特別養護老人ホーム、精神障害者授産施設の方々の協力を経て作品展示やパン販売、長岡市出身の「ひなた」によるライブ、献血といった新しい試みを行うことができました。サークルやゼミの発表、学年企画などとともに、地域の方々にも広く大学を知ってもらうことやつながりといったものを感じていただけたのではないかと思います。

当日は天候が悪いにもかかわらず、多くの来場者をお迎えでき成功のうちに終えることができました。これは学生みんなが大学



よさこいサークルによる演舞

祭に向け、放課後遅くまで準備を重ねていった成果だと思っています。

自分を含め、実行委員を後夜祭で労ってくれたことが嬉しく、今でも覚えています。その反面、自分たちばかりが労いを受け、他の係の人には感謝の一言を言えなかったのが心残りです。随分遅くなりましたがこの場を借りて言わせていただきます。

ポスター係、パンフレット係、オリジナル係、看板係、実行委員の仕事や各係の仕事を手伝ってくれた皆さん、本当にありがとうございました。そして、お疲れ様でした。また、3・4年生には実習や就職活動等の忙しいなか、学園祭に協力していただき本当に感謝しています。

最後に、来年度の実行委員会がより良い桜蓮祭にしてくれることを期待しています。



3年生企画による健康チェック



茶道部によるお茶会

連載6 成人看護学(急性期)

教授 深澤 佳代子

この4月に臨床経験が豊かな新任の講師、助手が赴任し、現在4名で成人看護学急性期を担当しています。成人看護学急性期では救急や集中治療期、周手術期など健康状態が著しく変化し急激な侵襲を受けた（あるいは受けるであろう）人々の状況を学生が的確にアセスメントし、さらに適切な看護に結びつける力を修得することを目的としています。

また、研究活動として、主にクリティカル・ケアに従事する看護者に焦点を当て臨床実践能力の発展に関するものや災害時急性期の看護者のメンタル・ヘルスに関する研究等に取り組んでいます。

成人期とは言っても、実際にクリティカルな状況に陥る人々は幅広い年代層に跨ります。成人期の人々の特徴を踏まえつつも、年代に関係なく臨機応変に対応できる力を発揮できるようにモデルの充実など学習教材を工夫してきました。さらに、学生にとって学びやすい環境を提供できるよう今後とも他領域との情報交換をしていきたいと考えています。



後列左から 石岡助手 山田助手
前列左から 深澤教授 高柳講師

教育組織の紹介

PBLを活用して学習をすすめるために ～サンディエゴ大学教授 クラーク博士をお迎えて～

学長特別研究(委託)代表 野地 有子

本学初の外国人講師による講演会が、2005年6月30日(木)に開催されました。本学では、全国の看護系大学の中でも先進的にPBL学習法を導入して2年目となり、学長特別研究において研究としても取り組んでいます。このような中、韓国における世界女性会議2005に参加されたサンディエゴ大学教授クラーク博士がその帰路に、本学で「PBLと教員の役割について」を講演くださいました。米国で看護教育に30年以上携わり、サンディエゴ大学でのPBLのご経験を踏まえた、わかりやすいお話でした。教員だけでなく学生の参加もみられました。

PBLとは、「学生自らが問題提起した実践的な課題に取り組む学習方法」であり、期待される効果は、①臨床推論技術、②学習意欲、③生涯学習の促進、④自分の足元にたった学習、⑤グループ交流の

技法、⑥臨床へ向けた知識の構造化、⑦学生と教員の満足、があげられました。一方で、課題としては、①よいシナリオの作成、②教員のPBL経験不足、③管理的サポートの必要性、④教員の時間とコストがかかる、⑤授業時間が多くなる、があげられました。

学長特別研究(委託)の本年度の柱は、シナリオとチューター・トレーニングです。クラーク博士からのアドバイスは、シナリオには、①教科書事例の活用、②患者事例、③複数の事例の組み合わせ、



講演中のクラーク先生

④患者の語り、⑤学生のつくったケースなどがあること、カリキュラム全体の評価として、各領域の達成課題と、PBLの課題をマトリックス一覧にして検討することでした。委託研究班では、シナリオの検討と、マトリックスの作成およびチューター・トレーニングについて検討を行っており、本学3年目のPBLがより充実した学習になるよう準備をすすめております。

特別講演「大学院における研究指導のあり方と課題」

研究推進委員会 委員長 柿川 房子

2005年10月17日(月)に千葉大学看護学部・正木治恵教授の講演が行われました。



講演中の正木先生

文部科学省の高等教育課において、看護系大学、大学院の設置に関する指導をされた経験と、千葉大学での研究指導の実績から、2006年度に開設される本大学修士課程のあり方、課題につながる現実的かつ、身近な示唆に富む内容でした。大学の目的は「学問を歩進歩」させること、看護の高等教育は、社会のヘルス・ニーズに応えること、そして大学と実践の場の協働、すなわち、教育(人材育成)、研究(知の構築)、実践(質の向上)が期待する成果であることを確認することが出来ました。

修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野にお

ける研究能力、又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とし(大学院設置基準—文部省令)、研究指導では、①研究のよい師たらん、②看護学研究の徹底的訓練、③夢と志の育成(尊重)、④研究推進環境づくり—研究関連文献へのアクセス・研究発表機会の提供・国際研究メンバーとの交流・異分野や他大学研究者(院生)との交流—の重要性を強調し、さらに以下の具体的セミナーの例を示しました。

- 1) リーディングセミナー：当該題目の関連基本文献を広く読み、大学院生同士で報告し合う。
- 2) リサーチセミナー：大学院生の創造的研究の才能を育成し、テストするために開設される。(例：毎週リストされた基本的な研究文献を読むことを要請し、報告させ、自分の論文の出版以降なされた研究を紹介し、それに批判的コメントを付け加える)
- 3) 現在われわれが所有している知識がどれだけのものかを知り、その上でわれわれ自身が創造的に貢献出来る事柄が如何なるものであり得るかを明確に確認する作業が基本になっている
- 4) 日本には未だ十分には根付いていない学問研究の徹底的訓練(専門的完成への志向)

最後に論文審査のあり方に関する現実的な課題等にも触れ、研究科の始まりに直面している各教員にとって意義深いものでした。

特別講演「市民と研究を協働するために」

研究推進委員会 田中 キミ子

大雪が降り続く2006年1月18日(水)、午後1時から、第一ホールにおいてノエル・クリスマン博士による講演会「市民と研究を協働するために」が、看護研究交流センターおよび研究推進委員会の主催によって開演されました。近郊の保健師・看護師さん達をはじめ多くの人々が集まり、本学野地教授の通訳で進められました。

クリスマン博士は、米国ワシントン大学看護学部教授として長年教鞭をとられおり、ご専門は文化人類学と公衆衛生学で、米国文化人類学会においても著名です。今回のテーマは、地域を基盤とした参加型研究の理論と実践の応用を中心とした「市民と研究を協働するために」を講演して下さいました。

地域参加型研究とは新しい用語ですが、考え方自体は新しいものではなく、社会学研究分野では50年以上前からこの考え方が中心となってきています。講演では、地域の人々の健康はその地域の環境をうけているため、ライフスタイルに働きかけることによって健康増進ができること、また、この考えを社会に働きかけることが大切であり、働きかけによってシステムを動かし、人々の健康に関与する地域参加型研究の考え方からはじめられたことなどが話されました。さらに、博士が40年以上前から取り組まれている研究につ

いて、米国の健康づくりの当時の様子から、健康に関する専門職の力と、地域住民の力を引き出して協働しながら、人々の健康増進に努めてきたこれまでの研究経過、および地域のヘルスケアすべてのレベルに連立して働きかけるcontinuum of care(ケアの連立体)の概念が説明されました。また、禁煙を事例とし、シアトル市において臨床家、ソーシャルワーカー、社会学者などが協働して市に働きつけるうちに、市民が協力して主体的に禁煙するようになった研究の実際について、禁煙の難しさや日本の現状を客観的に捉えながら紹介されるとともに、パートナーシップモデル、地域リーダーシップの事例、国際的に取り組んでいる研究の現状についても述べられました。最後に、地域参加型研究は、私達に役立っている科学の進歩を、パートナーシップによって地域に対してサービスすることが重要であり、同時に研究者と地域の人々と相互の信頼が重要であることを強調されました。



クリスマン先生と通訳をつとめる野地教授

看護研究交流センター報告

平成16年の年の暮れが中越大震災で慌ただしく終わったと思ったら、もう一年経って、平成18年になってしまい、今は豪雪に家が潰されて被害にあう高齢者の話になっている。16年度センター年報に書いたが、被災者を対象としたケアの実践は、決して価値の低いものではなく、これこそ正に「実学」で、過去の歴史においても経験とそれに対処する実践に根ざして多くの研究がスタートしてきたのではないかと考える。下半期のセンターの活動を要約する。

1. 生涯学習・研修支援事業

実施すみの事業は以下の通りである（敬称略）

- (1) 一般公開講座
 - 1) 特別講演「自らの歩みから得た看護観を通して看護技術の意味を問う」
永井敏枝氏（国際看護師協会東京大会記念奨学基金理事）7月9日（土）
 - 2) 「海外の看護と日本の看護」（6回シリーズ）6月25日（土）～7月30日（土）
 - 3) 「サクセスフル・エイジングへの挑戦」（8回シリーズ）新潟工科大学と共催
10月1日（土）～11月19日（土）
- (2) 専門講座
 - 1) 看護英会話セミナー：①夏期セミナー 8月29日（月）、30日（火）
②秋期セミナー 9月26日（月）、27日（火）
 - 2) 看護情報処理セミナー・冬期セミナー ①12月15日（木）、16日（金）
②1月19日（木）、20日（金）
 - 3) 看護研究の基礎知識 7月9日（土）、10日（日）
 - 4) 看護研究ステップアップコース 8月～2月18日（土）終了予定
- (3) 看護職員臨地実習指導者養成講習会
受講者50名、開催期間8月22日（月）～10月20日（木）

2. 研究事業

(1) 地域課題研究費

平成17年度の看護研究交流センターの実施が承認された地域課題研究費は、下記の通り9課題である。配分された研究費総額は617万円である。

- （参考のために過去4年間分の地域課題研究費金額をまとめて表1に示した）
- 1) 豪雪地における高齢者の生活構造の変化とソーシャル・サポート・システムの評価
 - 2) 化学物質過敏症に関する研究
 - 3) 新潟中越地震の急性期看護に従事した看護師のメンタルヘルスに関する研究
 - 4) コンピューターを利用した訪問看護における看護技術学習支援教材の開発
—安全性の確保に焦点を当てて—

- 5) 看護系大学におけるIT環境整備による看護研究推進効果に関する研究
- 6) ヘルスケアの場におけるEcological Momentary Communication Toolとしての携帯電話の研究
- 7) 豪雪地域の在宅療養を支援する継続看護に関する研究
- 8) ニーズに基づいた看護職のナレッジアーカイブ作成の実証研究のための基盤整備
- 9) 新潟県下看護職の人材育成と現任教育に関する研究

表1 センター地域課題研究費の年次別推移

	応募件数	採択件数	配分研究費総額 (単位：万円)
平成14年度	14	14	662
平成15年度	16	16	778
平成16年度	10	9	521
平成17年度	10	9	617

(2) 科学研究費補助金

科学研究費補助金に関する情報提供・計画書作成支援については、平成17年度は臨時の事業として実施したが、平成18年度からはセンターの正式の支援事業としたい。参考に過去3年の実績を表2に示す。



サクセスフル・エイジングでのトランポピクスの演習

表2 科学研究費補助金採択状況一覧（新規採択分のみ）

公募研究種目	平成15年度			平成16年度			平成17年度		
	応募	採択	率	応募	採択	率	応募	採択	率
基盤研究(A)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究(B)	1	0	0	2	0	0	1	0	0
基盤研究(C)	7	1	14	6	4	67	5	1	20
萌芽研究	4	0	0	1	0	0	0	0	0
若手研究(B)	4	2	50	3	1	33	2	1	50
総計	17	3	18	12	5	42	8	2	25

（「応募」、「採択」とも件数、「率」は％）

1. 高校生の授業見学

今年度も、5月以降38回、高校生の授業見学が企画され、計25名のご参加がありました。

このうち、昨年の7月5日に開催された基礎看護学演習への授業には、3名の方がご参加くださいました。演習の内容は「フィジカルアセスメント」でした。

14時過ぎに集合し、体操着に着替え、簡単な説明を教務係担当者から受けた後、基礎看護学実習室で、在校生の2年生と一緒に演習に参加。参加した演習パートは神経のアセスメントで、音叉をくるぶしにあてての振動覚評価、ひざの打診による反射の評価、目を閉じてものを触る触覚の評価などを体験されました。

終了後の感想としては、「とても楽しそうな雰囲気だった」「先生や、一緒に行ってくれた学生がとても優しく接してくれた」「こんなにたくさんの体験ができるとは思わなかった。ますます来たいな」など、短いながらも有意義な時間をすごされたようでした。



膝の反射は…



体験学習

トピックス

3. 学生と教職員（企画委員会）との懇談会

2006年1月17日（火）、大学のよりよい発展に学生の意見を反映させることを目的に、この春卒業する第1期生と企画委員会による懇談会が開催されました。それぞれのゼミから選抜された学生の代表者14名と、学長、学生部長はじめ、本学の運営委員会の委員長、事務局長ほか、各事務部門の担当者が出席しました。また傍聴席も設けられ、公開して開催されました。

会は、事前に運営委員会ごと検討した、「学生に話し合って欲しいテーマ」についてゼミ単位で議論された資料をもとに、加藤学生部長の司会によって、授業に関する事項と学生生活に関する事項の2つについて進められました。

授業に関する事項では、自習室やパソコン設備を含めた自己学習を支援する環境の整備、授業満足度評価のフィードバックのあり方、講義内容の重なりは是正などが話されました。また学生生活に関しては、図書館の開館時間延長、自習室へのプリンタ設置の希望などが出されました。また、事務サイドからは冷暖房や照明を適正に使用していく学習者としての態度に関する指摘もありました。

当初予定していた2時間を超え、初めての懇談会は終了しました。教員にとっては学生の困惑や不足感を知る機会となりましたし、また学生にとっても学生個々の学習支援のために投入されている経費や、大学整備の充実に向けた準備状況を知る機会となったと思われます。



初めて開催された4年生代表者との懇談会



全体説明

サークル紹介



連載5 屋外球技サークル

代表 第3学年 小林 創

屋外球技サークルは、春から、冬に雪が降るまで、グラウンドが使える時期の晴れた日に学生が集まって活動しています。天気の良い日にみんなで集まって、キャッチボールなどをし、元気に身体を動かそうという方向性で活動しています。

昨年(2005年)春に、新潟県立看護大学に1学年から4学年まですべての学年が初めて揃い、男子学生も増えたことで、野球の試合をすることができました。学年対抗での野球大会も企画したのですが、天候や、3年生の看護学演習などの都合により、開催することができませんでした。2006年度はみんなの都合の良い日を選び、ぜひ開催したいと考えています。

青空のもと、笑顔で運動をするというのはとても気持ちがよく、楽しいものです。天候に左右されがちなので、活動日が不定期なのですが、外で楽しそうにキャッチボールをしている人たちがいたら、気軽に声をかけてみてください。一緒に青空の下でおもいきり身体を動かして、気持ちのいい汗をかきましょう。

入試関連情報

■新潟県立看護大学 看護学部 看護学科 平成18年度1年次入学試験結果一覧表

区分	募集人数 (a)		志願者数 (b)				志願倍率 (b/a)				受験者数 (c)				受験倍率 (c/a)				合格者数 (d)				合格倍率 (c/d)				入学者数			
	一般推薦	特別選抜	女性	県内	県外	男性	女性	県内	県外	男性	女性	県内	県外	男性	女性	県内	県外	男性	女性	県内	県外	女性	県内	県外	男性	女性	県内	県外		
一般推薦 (H17.11.26実施)	30	52	49	49	-	3	49	3	3	3	49	3	3	3	32	1	1	32	1	1	32	32	-	1	1	32	-	1	1	
特別選抜入試																														
社会人特別選抜 (H17.11.26実施)	若干名	5	3	2	1	2	3	1	2	3	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

※1 一般選抜前期の募集人員50名には社会人特別選抜の若干名を含む。
 ※2 地域別は出身高校所在地による。但し、社会人特別選抜の地域別は現住所による。
 ※3 一般推薦は新潟県内者に限られる。

■新潟県立看護大学 看護学部 看護学科 平成18年度3年次編入学試験結果一覧表

試験種別	募集人数 (a)		志願者数 (b)				志願倍率 (b/a)				受験者数 (c)				受験倍率 (c/a)				合格者数 (d)				合格倍率 (c/d)				入学者数			
	3年次編入学 (H17.9.7実施)	10	13	女性	11	県内	9	県外	2	男性	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	6	2	1	1	1	1		
3年次編入学 (H17.9.7実施)	10	13	11	9	2	2	11	2	1	1	1	1	1	8	2	1	8	2	1	8	6	2	1	7	5	2	1	-		

※1 地域別は出身高校の所在地による。
 ※2 入学者数は、入学手続完了者の数である。

編集後記

昨年末から今年にかけて、各地で記録的な寒さと大雪を観測しました。気象庁によるとこの冬は20年ぶりの全国的な「寒冬(かんとう)」になる可能性が高いそうです。大雪には慣れているはずなのに、昨年の暮れから自然の威力に、ただただ圧倒されるばかりでした。しかし待ち遠しかった旅立ちや出会いの春も目の前です。ここ新潟県立看護大学でも第一期生が4年間の学びを終えて社会に羽ばたいていきます。今回は希望に満ちた4年生の看護研究の様子をお伝えしました。

校歌の一節に『学ぶ言葉を 培い あふれくる思い紡ぎ 皆の心に そそぐよ』とあるように、卒業生たちもあふれる思いを言葉にして、接する人々の心を満たしてくれることでしょうか。活躍が楽しみです。(広報委員 山本淳子)



新潟県立看護大学
 Niigata College of Nursing

本学ホームページ
<http://www.niigata-cn.ac.jp>

広報委員会 (柿川房子、北川公子、田中キミ子、山本淳子)
 〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地
 Tel 025-526-2811 Fax 025-526-2815
 E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp

発行日：2006年2月13日

